

上浦町出身者の

移住集落について

—大分市八幡地区へ移住—

矢野 彌生

(会員・佐伯市中山区)

はじめに

上浦町では古くから「豊後土工^{ぶんごどこうこ}」と呼ばれた出稼ぎ者が多いが、なかでも出稼ぎ先に生活の場所を移し、挙家離村してしまった例が多い。

古くは、長田浦の七戸が北海道へ移住した例もある^田。

また、次男・三男の人たちが江戸末期から明治・大正・昭和の各時代に大分市の八幡地区(第1図参照)へ移住して集落を形成した事実がある。

本稿では、上浦町の移住史の一端を、若干の資料と現地調査をもとに報告したい。

一 府内藩机張原の開拓

開拓の発案者

は広瀬久兵衛

机張原(吉兆原)は第1図で分かるように別府湾に臨むトロイデ(鐘状火山)

高崎山の東部山麓に広がる標高約一五〇メートルの丘陵地に立地しており、面積約六十一町歩、世帯数七十五(平成四年)の小集落である。この丘陵地の開拓は、府内藩の財政窮乏による財源獲得の方法の一つとして実施されたものである。

〈開拓の計画と開拓地の選定〉 この開拓を発案したの

は、天保十三年(一

八四二)府内藩財

政の取締人として

赴任した広瀬久兵

衛である。

広瀬久兵衛は、

日田豆田町(日田

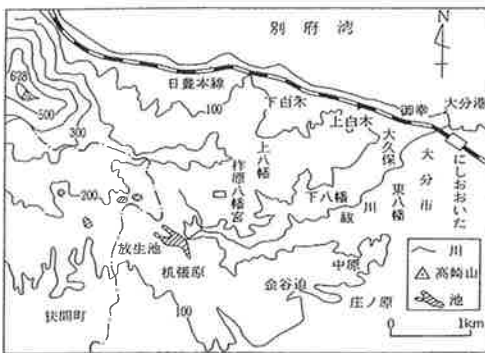
市)の代表的商家

広瀬家(博多屋)

の当主であり、文

化七年(二八一〇)、

兄淡窓に代わって



第1図 八幡地区の位置と地形

家業を継ぎ、西国筋郡代の掛屋や諸藩の御用達などを勤めている。家業の傍ら、西国筋郡代塩谷正義の計画する公共土木事業を推進する中核となり、小ヶ瀬井路の開削、久兵衛新田をはじめとする周防灘沿岸などの新田開発も行っている。

広瀬久兵衛は植栽開墾に目を向け、府内藩内を調査し、その開拓候補地として、「領内西部の七蔵司字ミボタ」（狭間町）を内定した。早速高崎村里正佐藤弥治衛門と協議したところ「ミボタ」を変更せざるを得なくなつて、机

第1表 御米十八俵拝借代金名簿（安政7年7月22日）

戸主氏名	家族員	戸主氏名	家族員
右衛門郎	6	初右エ門	5
作四郎	4	平次郎	9
小四郎	6	杉蔵平	3
治助	6	権右エ門	5
清兵衛	9	光右エ門	4
光五郎	4	久右エ門	6
右エ門	8	長蔵	2
半右エ門	6	清六	6
万蔵	6	金治郎	3
仲右エ門	5	定八	8
伊勢右エ門	5	平右エ門	11
常七	4	安右エ門	3
徳右エ門	5	良右エ門	7
豊五郎	5	計	27戸 151人

（工藤繁則氏による）

第2表 机張原開拓者の出身地と入植地（安政7年）

出身地組	浅海井	網代	夏井	碓干浦	日向泊	日田	計
十軒		9	1				10
中六軒	5			1			6
下六軒	6						6
女狐	3	1			1	1	6
計	14	10	1	1	1	1	28

張原に決定した。地域は、「高崎村地内新村以東女狐以北不残」と、「柞原村金谷迫村地内放生池通水路以南牛王向原野」の二カ所で約六十一町歩ある。これらはすべて府内藩主の買収によるものであった。

開拓世話掛り主任

広瀬久兵衛 佐藤弥治衛門

机張原の開拓者の指導者をも



第2図 机張原の開拓者の家屋の配置

同世話人 府内町

讃岐屋 喜兵衛 塩屋 善五郎

三文字屋 忠平 中野屋 清

兵衛

入植者世話人

藤田屋 伊勢右衛門 富高常七

伊藤治助 岡崎小四郎

開拓世話掛り主任は、開拓に関する最高指導者に当たり、世話人は、府内の豪商連中で開拓に必要な一切の経済的融資を行い、入植世話人は、入植者の中の代表者である。⁽³⁾

入植者の中心は 安政三年（一八五六）丙辰年正月十七日佐伯藩の人々 日より溜池の築造に着手するなど、準備は着々進められた。一方入植者の募集も耕地に乏しい佐伯藩などに依頼されている。また、入植者は海路府内に入り、府内より椎迫・庄ノ原經由の道路をとった。

〈安政四年に最初の入植者〉 「安政四年八月廿日、佐

伯出百姓三人罷越高崎の地方大歟の由、当月末より入込候云々」と、三名の佐伯出百姓が入植しているが、それはいったん引揚げ、その後同月廿五日に六名の入植者をむかえている。これが最初の入植者である。その後、九月廿日にも入植しているが、何名かは不明である。しか

し、十二月八日、広瀬久兵衛の机張原視察のとき、「家数十六軒うち七軒は完成し、九軒建設中」と久兵衛日記に記されていることにより、九月廿日の入植者は七名と推測される。入植者は年末に一応帰省し、翌春海路家族を同伴して入植した。

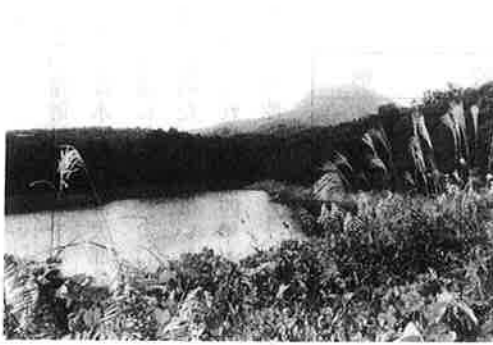
その後、安政六年正月七日「机張原出百姓へ酒一升宛遣す、一斗六升塩屋預り書、但し軒数十六軒也」から察すると、安政四年九月廿日以後の入植はなかったことが分かる。その後、安政六年三月三十日広瀬久兵衛、佐藤弥治衛門と協議の結果、荒地を起し返せば、机張原には出百姓も三十軒は可能なることを申し合わせ、第二期の開拓計画に着手している。

翌年の安政七年三月十一日、佐伯より出百姓三家族計十二名が入植している。その後、相ついで入植し同年七月廿二日の「御米十八俵の拝借代金の名簿」（第1表参照）によれば、戸数廿七戸、人口百五十一人で、その戸数は明治初年における「入植者名簿」と一致することから入植は完了したものと思われる。

〈安政七年に第二期入植者〉 第一期入植者は、安政四年八月廿日より翌年春までの間に行われ、最初は単身で

入植し、後家族を呼びよせている。第二期入植期間は安政七年三月十一日より廿一日までのわずか十日間に行われているが、最初より家族同伴であった。

いま、入植者の出身地、家屋の配置をみると、第2表、第2図のとおりである。すなわち、入植者の出身地は広瀬久兵衛の従者を除いて佐伯藩の海岸部の人々であることが分かる。また、家屋は四カ所に配置され、十軒組（十軒）・中六軒組（六軒）・下六軒組（六軒）・女孤（六軒）^{めはる}となっている。第二期入植者は下六軒組の六軒と女孤の六軒の計十二軒となっている。入植者一戸ごとに給与物として、次の物が支給されている。



机張原の放生池（背後の山は高崎山）

家一軒 銀七
百目（第二期入植者のみ）

雪隠 銀三

十六匁

牛一匹 銀四百目

農薬代 二百目

種子拝借 五十目

地起代 三百目ないし一貫目

（入植者をめぐり佐伯藩とのトラブルを心配） 机張原

への入植に際し、府内藩と佐伯藩のトラブルが心配されていたが、入植者たちは出身の村浦において養子にいくという口実で人別帳から除く手続きを済ませていると報告されている。

開拓の 第一期の入植者は九月十五日より年末までハ状 況 ゼの植付を行い、十一月には一旦佐伯に帰省し、翌年再び家族を同伴し、それぞれ開墾を開始している。

（人手の少ない家は、人夫を雇い開墾） 藩の意図としては協力して開墾させるため各組ごとに家屋を建築したけれども、入植者たちは各人で勝手に地起こしをしている。広瀬久兵衛はこの開拓状況をみて協力してやるように説得したが、ついにその効果がなく、従って開墾が人手の少ない家はおくれたので、開拓世話人である府内町の豪商より借財して一人一日二匁の賃金で人夫を雇い開

第3表 分家

番号	氏 名	分家年	続 柄
①	松田 甚蔵	明治8年	郡 蔵 弟
②	藤田八重吉	〃 8年	平次郎 次男
3	益田弥喜蔵	〃 17年	三 平 次男
4	青座 亀蔵	〃 14年	栄 蔵 弟(離村)
⑤	藤田美保蔵	〃 19年	久治郎 三男
6	木崎 長蔵	〃 19年	善四郎 弟(離村)
⑦	藤田 悟	〃 36年	松 蔵 弟
⑧	藤田伊三郎	大正4年	万 作 弟
⑨	富高 藤平	〃 7年	常 七 弟
10	伊藤 宝作	〃 11年	吉次郎 弟(離村)
⑪	中村 高喜	〃 12年	広 蔵 弟(離村)
12	益田 吉人	〃 13年	治太郎 弟
⑬	藤田 藤茂	〃 15年	万 作 弟
14	佐藤佐五郎	昭和2年	森 蔵 弟
15	拙尾 茂人	〃 3年	利八郎 弟
⑬	中村佐太郎	〃 10年	広 蔵 弟(離村)
⑬	藤田 百蔵	〃 14年	万 作 弟
⑬	藤田 守	〃 14年	万 作 弟
⑬	中村 猛	〃 15年	広 蔵 弟(離村)
20	佐藤 義雄	〃 16年	団 作 弟(離村)
⑮	藤田 正保	〃 16年	竹 蔵 弟
22	伊藤 正	〃 16年	吉次郎 次男(離村)
23	橋本 主税	〃 16年	定 弟(離村)
24	佐藤 政雄	〃 17年	喜次郎 弟
⑮	藤田 勝喜	〃 19年	松 蔵 次男(離村)
26	藤田 行男	〃 20年	竹 蔵 次男
27	佐藤 亮	〃 21年	森 蔵 弟
⑳	富高 行男	〃 21年	庄久郎 三男
㉑	富高 健喜	〃 23年	広 喜 弟

(注) 表中の○印は上浦出身者と推定
(現地調査による)

懇した。

この借財は農産物を収獲したときに支払われた。作物としては水田以外は大部分ハゼを植えつけ、その収獲の半分を藩に納め、残りは唯一の換金作物となっていた。藩に納めたハゼの償いとしては毎年酒四斗をもらっていたが、これは明治四年(一八七一)の廃藩置県まで続いた。その他、かんしよ、野菜、果物も植えられているが、

これらのほとんどは自給自足に過ぎなかった。⁵⁾

〈開田と溜池の築造〉

府内藩高崎村の大庄屋佐藤万里は、府内藩の財政整理に招へいされていた広瀬久兵衛の協力をえて、安政二年庄ノ原および机張原の原野の開墾を計画し、藩の許可を受けて佐伯地方より移住民を募り、戸数三十五戸を得て、田畑五十余町歩を開発している。ついで、慶応元年(一八六五)には、庄ノ原に通水工事

第4表 慶応元年の机張原

		田		畑		屋敷	
		反畝歩	石	反畝歩	石	反畝歩	石
女狐道	詰所	20	0.0155	3-2	0.0405	1-4-22	0.1962
拾軒組	磯右衛門	6-21	0.1562	5-7-26	0.7708		
	恵十郎	6-3	0.1422	3-6-15	0.4862	1-3	0.0147
	小四郎	7-1	0.164	2-3-3	0.3077	1	0.0133
	治助	7-2	0.1647	4-5-11	0.6044	1	0.0133
	清五郎	9-11	0.2183	4-5-3	0.6007	1	0.0133
	光五郎	7	0.1632	3-8	0.5062	1	0.0133
	利喜右衛門	8-12	0.1958	5-3-27	0.7179	1-12	0.0186
	半右衛門	5-14	0.1274	3-7-22	0.5062	27	0.012
中六軒	萬藏	4-26	0.1134	2-6-17	0.3539	24	0.0107
	仲右衛門	5-25	0.136	3-9-10	0.5239	1-10	0.0178
	伊勢右衛門	7-12	0.1725	3-9-9	0.5235	2-12	0.032
	恒七郎	2-25	0.066	4-1-27	0.5581	1-2	0.0142
	滝五郎	3-4	0.073	5-1-29	0.6878	1-3	0.0146
	秀藏	4-6	0.0979	2-7	0.3596	1-2	0.0142
	太平吉郎	7-3	0.1655	3-6-4	0.4813	1-2	0.0142
	次郎	3-12	0.0793	3-8-25	0.5173		
女狐道	庄八郎	1-2	0.0249	2-6-23	0.3565	1	0.0133
	安右衛門	1-2	0.0249	5-3-29	0.7188	24	0.0107
	勝五郎	2-3	0.049	4-8-13	0.6451	1-17	0.0209
	金藏	28	0.0218	1-6-11	0.218	18	0.008
	定次郎	28	0.0218	3-6-18	0.4875	1	0.0133
下六軒	松五郎	28	0.0218	2-7-27	0.3716	1-10	0.0178
	源三郎	1-29	0.0381	3-4-5	0.4551	1-15	0.02
	善四郎	28	0.0218	3-9-18	0.5275	1-10	0.0178
	久右衛門	22	0.0171	3-16	0.4067	24	0.0107
	和三郎			1-7-22	0.2362	20	0.0089
	清六	1-2	0.0249	2-5-22	0.3428	1-12	0.0186
稲荷田		3	0.04				
計		11-29	2.5866	102-6-4	13.6681	4-2-29	0.5723

(注) 慶応元年「御開地畝高取調帳」より。
(「上浦町史」より引用)

を竣工させている。

また、八幡村のうちに築造された放生池と御神田池は、どちらも幕末の慶応元年高崎村の庄屋佐藤弥治右衛門（万里）の築造になるものという。現在でも放生池は庄野原と上八幡地域の水田約四・五ヘクタを灌漑する大切な灌漑施設である。堤の長さは八十六メートル、高さは十四・五メートルで、約十九万五千立方メートルの水を蓄える能力を持っているが、これは築造以来大きい変化はないという。

さらに、放生池のある机張原の地は安政二年に開拓をはじめた新開地であるため、田地を養う水が必要であった。このため、安政三年から高崎の新村焼野に「吉兆原堤」の築造をはじめ、三年後には完成している。また、佐藤家文書によると、明治元年（一八六八）には堤土手の嵩上工事を進めている。明治三年にはこの堤の下手にもう一つの新しい溜池を築造している。



机張原の共同井戸（開拓以来使用しており、現在も生活用水として使用）

二 開拓後の机張

原の変容

机張原の
戸数の推移 政年

間に佐伯藩の海岸部の人々を中心に机張原に開拓のため移住

第5表 机張原の耕地面積の推移

	田		畑		山林		宅地		原野其の田		計
	町反畝歩 (%)	増減	町反畝歩 (%)	増減	町反畝歩 (%)	増減	町反畝歩 (%)	増減	町反畝歩 (%)	増減	
明治 20年頃	7.3.2.19 (12)		22.7.7.02 (38)		24.9.3.22 (41)		2.6.5.02 (4)		3.3.5.02 (6)		61.0.3.17
明治 45年	8.2.8.17 (13)	+ 9.5.28	21.8.4.23 (36)	- 9.2.09	25.5.5.03 (42)	+ 6.1.11	2.6.6.02 (4)	+ 1.00	2.6.9.02 (4)	-6.6.00	
大正 14年	12.2.3.21 (20)	+3.9.5.04	19.2.3.29 (32)	-2.6.0.27	24.0.5.28 (39)	-1.4.9.05	2.7.4.10 (4)	+ 8.08	2.7.5.19 (5)	+ 6.19	
昭和 27年	16.8.3.14 (27)	+4.5.0.23	17.0.5.24 (29)	-2.0.8.05	21.4.5.00 (35)	-1.6.0.28	2.7.5.00 (4)	+ 2.9.10	2.6.8.15 (4)	- 7.04	

（『土地台帳』による。工藤繁則氏の調査）

してから、机張原はどのように変貌していったか。詳細については資料不足で不明な点が多いが、概略述べてみたい。

〈戸数一・六倍、人口二倍に増加〉 安政七年の「御米拝借代金簿」によると、戸数二十八戸、人口百五十一人で、第二次大戦後の昭和二十八年には、戸数四十六戸、人口二百九十八人と、戸数で一・六倍、人口で二倍増加している。

いま、戸数の変遷過程をたどると、入植より明治五年までには嘉永三年（一八五〇）と慶応三年に各々一戸ずつが入植し、二戸が離村したが、慶応三年同居者の別居があったため、結局一戸が増加したことになった。次に明治二十一年までには、同十九年に二戸入植し、一戸が離村、また分家七戸のうち二戸が離村し、その結果三十五戸となった。

昭和五年（一九三〇）までには、六戸が離村し、分家九戸のうち一戸が離村したため、結局二戸の増加となった。

〈戸数の増加のほとんどは分家によるもの〉 昭和二十八年（一九五三）までをみると、一戸が離村し、分家十

四戸のうち六戸が離村したが、第二次大戦後一戸入植して四十六戸となっている。

以上を通算すると、第一期、第二期入植者二十八戸のうち、八戸の離村者があり、分家二十九戸のうち九戸の離村者があったことになる（第3表参照）。

安政七年以降の入植者はわずか九戸にすぎず、この机張原の戸数の増加は分家によるものであった。

耕地の 机張原の開拓後の耕地面積の推移を概観する
推移と、第4表、

第5表のとおりである。安政六年机張原堤の完成以来、水不足をきたすため、明治元年少し嵩上げ（土手をより高くする）が行われた。また、明治三年二月十日新たに机張原堤の下に約二反歩の溜池が築造された。これを小



机張原の丘陵地と集落

堤と呼んでいる。

〈水田の大幅増加、畑地の減少〉

耕地は明治二十年ごろの土地台帳により、第5表に示すように三十町九畝二十一歩で、明治四十五年までにわずか三畝九歩の増加をしたにすぎなかった。これを水田、畑地別に分ければ、水田は九反六畝の増加に対し、畑は九反二畝減となつてゐる。



机張原の農家

その原因は明治三十一年二月五日の小堤の嵩上げである。この嵩上げを機会に新村の人と協議の結果、水利費を収めさせ、灌漑を行うことを約束した。水田の分布は、明治二十年には水便利のよい十軒組、西部および放生池の上詰所の前にあり、同四十五年までには十軒組の西部に開田がみられ

る。

大正時代には約一町三反増加しているが、とくに水田は四町歩近い増加を示している。これは畑および山を切り開いて水田としたものであるが、その水源は明治四十五年（一九一三）机張原堤の東に約二反五畝の小堤が築造され、水はトンネルによつて送られてきた。これによつて約四町歩が水田化した。この時に開田されたものを新田といい、以前のものを旧田と土地の人々は呼んでいる。前者は十軒組の西端、下六軒組の前の凹地に多い。

昭和に入つて約三町歩の開墾が行われ、水田は四町五反増加しているがそれは、昭和三年（一九二八）の小堤築造と中六軒裏の小さな溜池二個の築造で、従つて水田も中六軒裏と谷間の部分である。

耕地では水田が年々増加し、それに対して畑は減少の一途をたどつてゐるのは、米の自給自足を計るためにほかならない。

〈米・麦・さつまいもから野菜・ミカン栽培へ〉 八幡小学校の『九〇周年記念誌』は、八幡地区の産業（主として農業）の推移について、次のように平易な文で語つてゐる。

みなさんは、机張原行きのバスから道路ぞいにあるハゼの木の大きな切りかぶや、そこから若木が芽を出しているのを見かけたことがありますか。あのハゼの木こそ、わたしたちの先祖をすくい、今のような豊かな生活への原動力となったのです。久兵衛は、あれ地を開くと同時に、大阪から取りよせたハゼの苗木一万本を植えさせました。そのころは、『あんどん』などにろうそくをともしてあかりをとっていたので、ろうそくの原料であるハゼの実は、収入の少ない開拓者にはたいせつな現金収入となっていたわけです。

土地の古老は、「わたしたちの子どものころ、坂本、中原、机帳原、大山は、どの畑にも直径一畝をこえるハゼの太木が数十本もあり、実をとるところになると、おとうさんが朝早くから夕ぐれまで毎日とっていたものだ」と話してくれました。このハゼの木とハゼの木の間にさつまいもを植えて、人々はうえをしのぎながら田畑を切り開き、池を掘り、橋をかけ、道をつくりました。

ところで、みなさんは放生池から二ふたほど（高崎

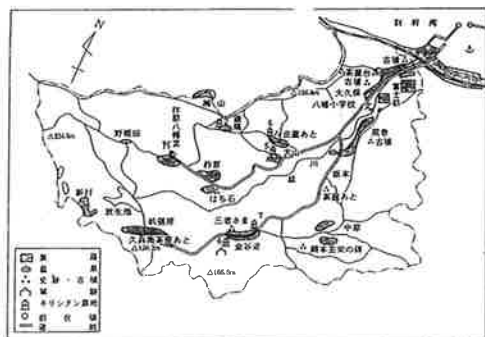
山のふもと）に学校の敷地ぐらいの大きな池が三つあるのを知っていますか。これは、水に恵まれない机張原の田畑に水を送るために、久兵衛がその中の二つを作りました。（中略）

こうして七〇年の年月が過ぎました。あれ地もりつぱな田畑になるにつれ、農家の収入もふえてきました。その上、電燈の普及とともにろうそくの利用者も少なくなつたので、ハゼの木は掘りおこされ、切りとられ、かわりにカキの木が植えられました。そのカキの木も今では高さ一〇〜一五メートルもの太木になっています。畑の作物もさつまいもから麦や稲にかわつてきました。

ところが、日本の産業の成長につれ、農業も大きくかわりはじめました。ことに、第二次大戦以後、大分市の商工業が急にさかんになってきたこと、食生活の向上によって、麦や米、さつまいもから野菜・みかんづくりが農業の中心になってきました。

現在、机張原では、野菜・みかん栽培のほか花き栽培なども行なわれており、大分市の近郊農業地帯に変貌している。

第3図 八幡小学校の校内案内
 (『八幡小学校記念誌』による)



転車百三十二台、荷車十台、荷馬車十二台あり、電話加入者四人、ラジオ聴取者十一人あった。平成九年五月一日現在の世帯数一八八四世帯、総人口五千二百十四人(八幡小学校校区・大分市統計課)。

三 上浦町と大分市八幡地区

上浦関係者、数百年 八幡地区の行政上の推移をみると、世帯八幡地区に居住 明治二十二年(一八八九)に大分郡

八幡村(八幡村・神崎村・金谷迫村が合併して成立)となり、昭和十四年(一九三九)に近郊農村である八幡村は大分市に編入されて、現在に至る。昭和十四年当時の八幡村の本籍人口は三千七百六十三人で、主な産業は農業。村の年間予算二万四千九百七十四円。村には当時自

〈上浦町と八幡地区の交流〉 上浦町では、町誌製作の参考にと、平成五年(一九九三)二月四日に、上浦町長ら関係者が八幡地区公民館を訪ね、地区民と懇談している(筆者も調査を委嘱されて同行)。

前述したように、八幡地区と上浦町は今から約百五十年前、同町の農民が八幡地区(最初は机張原)の農業開拓のために移住したことがきっかけで、長い間交流が続いている。また、現在、子孫の三代、四代の人々がバスでふるさとを訪問するなど、両地区の友好・交流が盛んである。

〈八幡地区の全域に上浦関係者が居住〉

現在、上浦関係者が数百世帯、八幡地区のほぼ全域にわたって、居住していることが現地調査で分かった。すなわち、上浦



上白木の集落

出身者の子孫（多くは三代、四代）の居住者が多い地域をあげると、机張原（七五世帯中五〇世帯が上浦関係者）、東八幡（四〇〇世帯中八〇世帯）、大久保（一二〇世帯中四〇世帯）、上白木（三五〇世帯中一八〇世帯）、金谷迫（一三〇世帯中一〇〇世帯）などが主なものである。そのほか、御幸、下八幡にも上浦関係者が若干居住しているという（以上の世帯数は概数）。

また、現地調査の結果、第二次大戦後にも上浦町から八幡地区への移住があり、昭和三十年代にも八幡地区へ上浦町から移住した人もおり、大分市八幡地区と上浦町は深いさずなで結ばれている。

付記 本稿をまとめるにあたり、机張原をはじめ、祇川流域の各地区や、八幡小学校・八幡公民館など取材で、平成四・五年の二回にわたって現地調査を試み、みた。八幡地区の方々や、大久保区長の松下又重さん、上白木の大明明さん、机張原の堀尾和雄さんには大へんお世話になりました。紙上をかりて厚くお礼申し上げます。

なお、本稿は筆者が『上浦町誌』（平成八年）に発表し

たものを骨子とし、その後の補充資料に基づいたものです。

注

- (1) 佐藤蔵太郎『東上浦村誌草稿』（昭和六年）
- (2) 佐藤晃洋「吉兆原への入植」（『上浦町誌』平成八年）
- (3) 工藤繁則「豊後机帳原の開拓」（『大分県地方史』第6号大分県地方史研究会 昭和三十一年）。また、同氏研究は主として佐藤節次蔵『吉兆原開拓之記』と広瀬正雄蔵『久兵衛日記』をもとにまとめられている。
- (4) (3)に同じ
- (5) (3)に同じ
- (6) 『大分県農地改革史』（大分県 昭和二十七年）
- (7) 『大分市史』（大分市 昭和六十三年）
- (8) (3)に同じ
- (9) (3)に同じ
- (10) 『九〇周年記念誌―のびゆく八幡』（大分市立八幡小学校 昭和六十年）
- (11) (7)に同じ